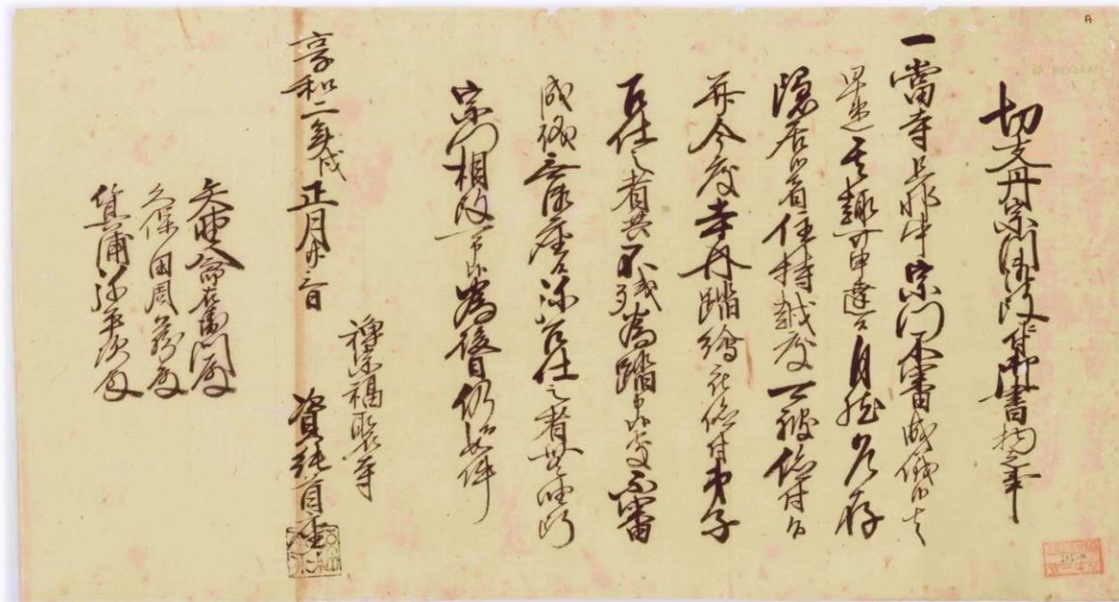


# 日本近世の古文書

—くずし字解読と内容理解のために—



国文学研究資料館  
太田 尚宏  
OTA, Naohiro

# 「古文書を読む」とは…

---

1. 古文書の形(形態・記述様式など)を知る。
2. くずし字を解読する。
3. 候文(和様漢文体)を読み下す。
4. 文章の内容を理解する。
5. 古文書の記載事項や他の古文書・参考資料などを使って、史料の作成意図や意義を理解する。

---

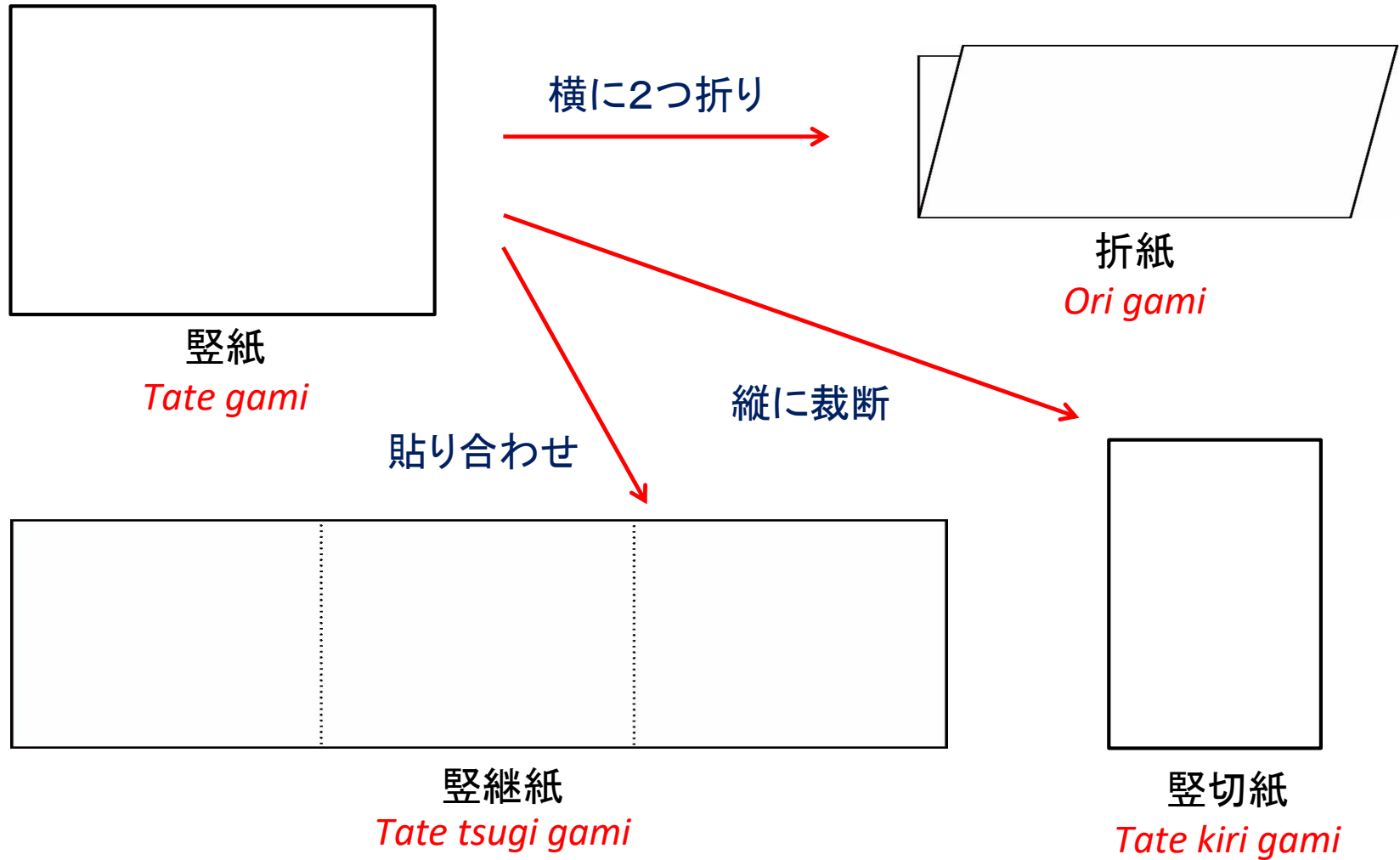
# 古文書の形を知る

---

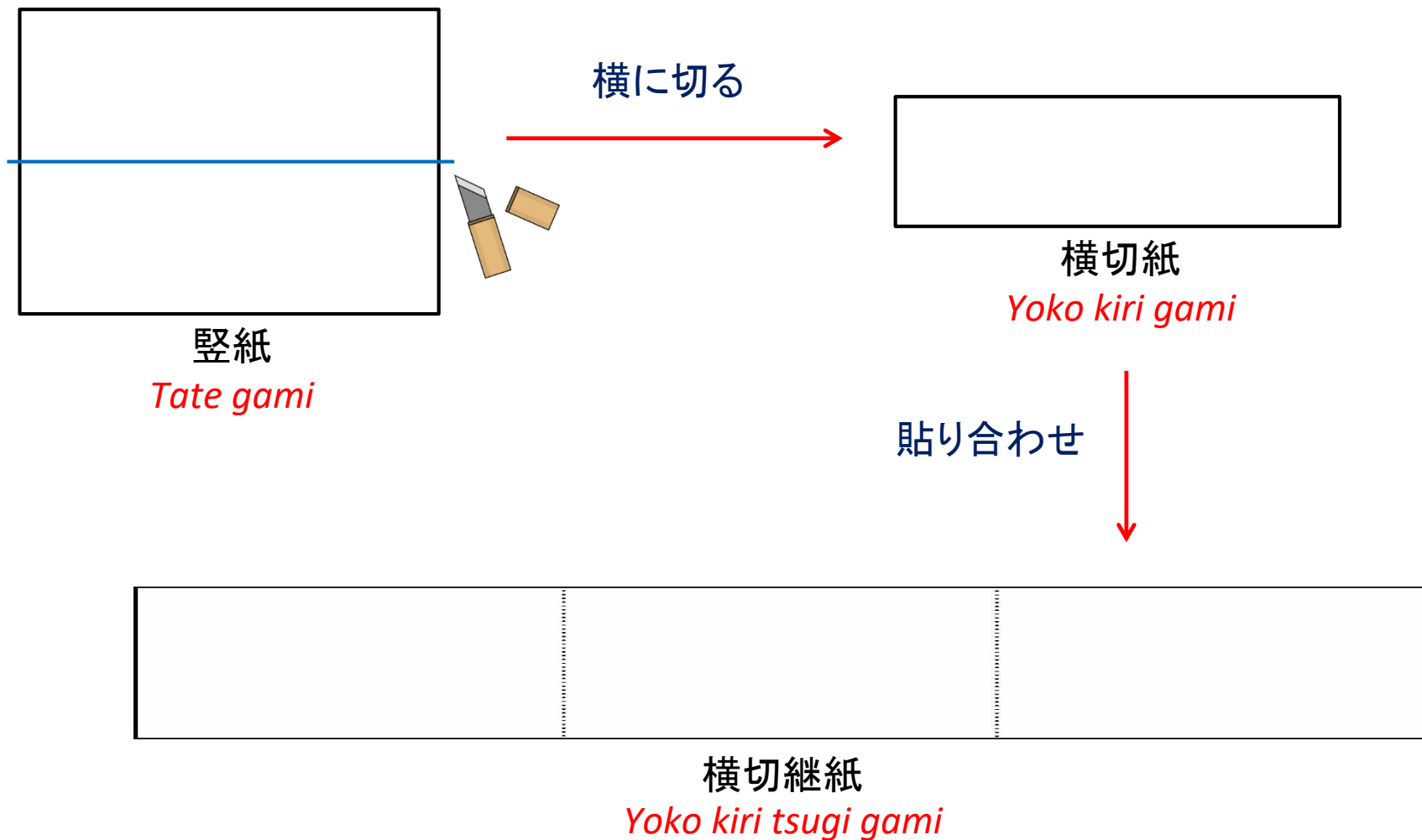
# 古文書の形態

総称 General term	名称 Type
状 <i>Jō</i> (Rolled and pressed document)	縦紙 <i>Tate gami</i> 折紙 <i>Ori gami</i> 縦切紙 <i>Tate kiri gami</i> 縦継紙 <i>Tate tsugi gami</i> 横切紙 <i>Yoko kiri gami</i> 横切継紙 <i>Yoko kiri tugi gami</i>
冊子 <i>Sasshi</i> (Booklet)	縦帳 <i>Tate chō</i> 横長帳 <i>Yoko naga chō</i> 横半帳 <i>Yoko han chō</i>
綴 <i>Tsuzuri</i> (Binding)	

# 状の作製過程と名称①



## 状の作製過程と名称②



# 状のもとになる和紙

料紙の大きさは地域によって異なり、漉き枠の大きさによって縦・横の長さが決まる

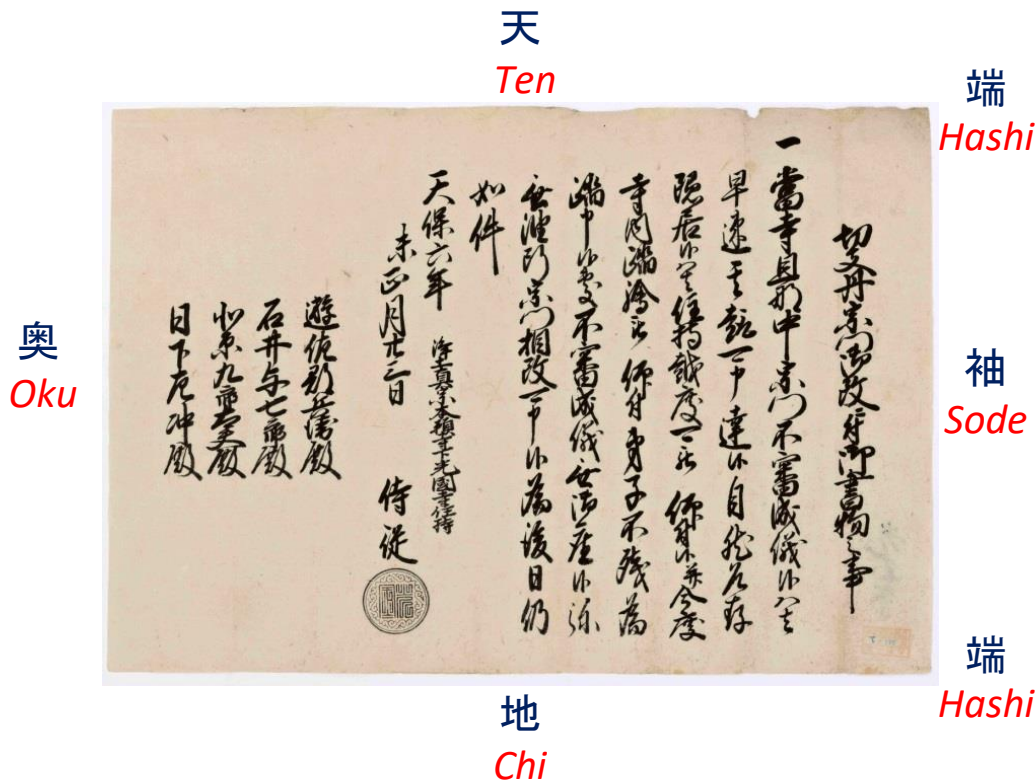


江戸時代の文書に使われる主な料紙と大きさ

和紙の種類 Typology of Japanese paper	縦 length (cm)	横 breadth (cm)	判型 size
美濃大直紙 Mino oh naoshi	33	45	大美濃判 Oh Mino ban
美濃中直紙 Mino chu naoshi	29	41	美濃判 Mino ban
美濃小直紙 Mino ko naoshi	27	40	
石州半紙 Sekisyu banshi	25	41	半紙判 Hanshi ban
土佐半紙 Tosa hanshi	24	33	
駿河半紙 Suruga banshi	22	30	

# 「状」の各部の呼称

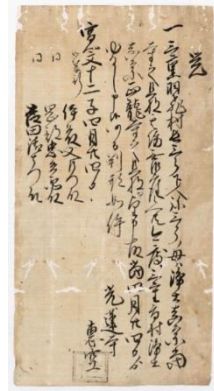
状の各部には呼称があり、上部を「天」、下部を「地」、文章の始まる方(右側)を「袖」、文章の終わり側(左側)を「奥」という。  
また、「袖」の両端を「端」と呼び、「端」の裏側に書かれた文章を「端裏書」という。



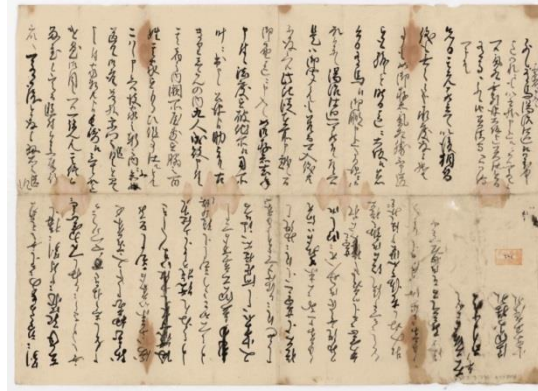


# 「状」のいろいろ

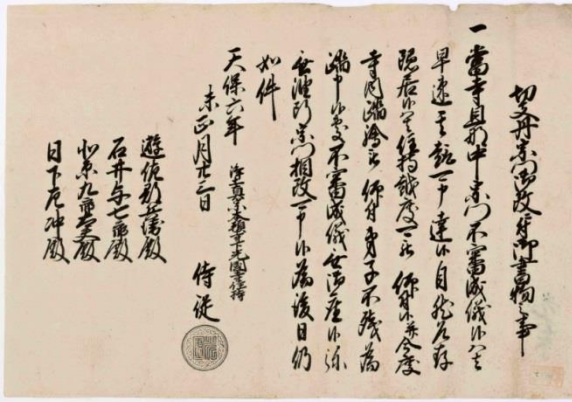
縦切紙



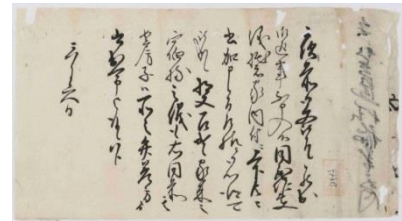
折紙



縦紙



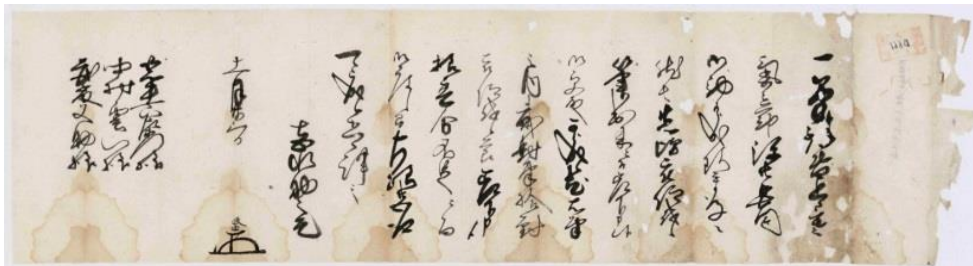
横切紙



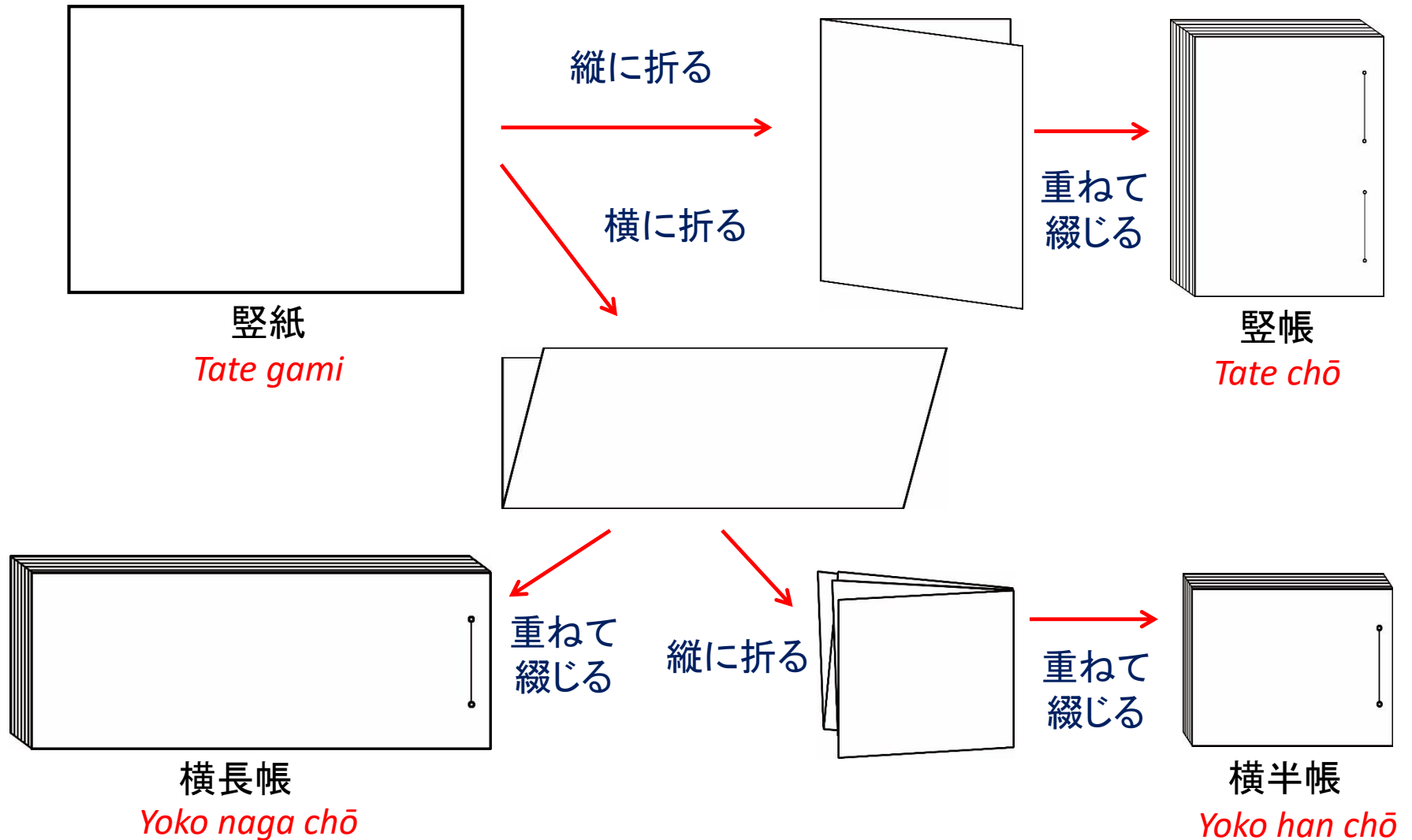
縦継紙



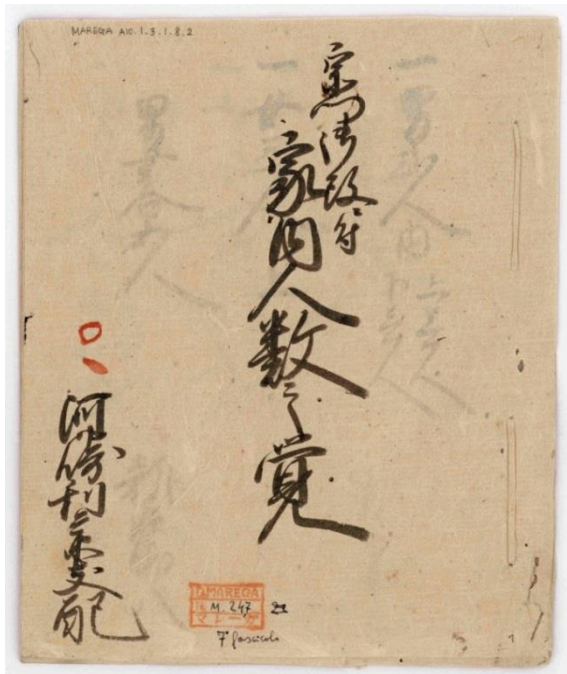
横切継紙



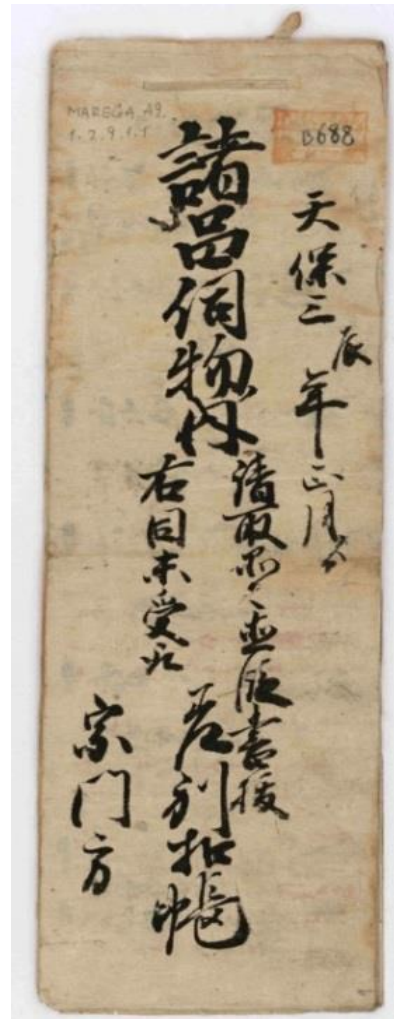
# 冊子の作製過程と名称



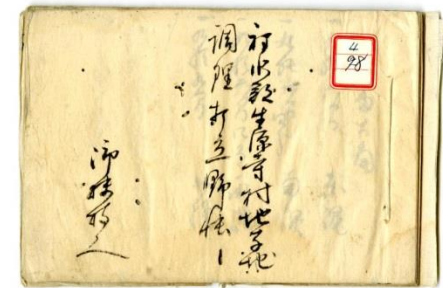
# 「冊子」のいろいろ



縦帳



横長帳



横半帳

---

# くずし字を読む

---

# くずし字解読の基本

---

## 1. 部首(偏旁冠脚など)から文字を類推

くずし方から部首を推定し、辞書で推定した部首の部分を調べる  
最初は時間がかかるが、最も基本的な方法  
部首のくずし方の特徴を覚えると、効率的に検索できる

## 2. 筆の運びから文字を類推

漢字には筆順(書く順序)がある  
筆の運びを見て、文字の全体像をつかむ

## 3. 熟語・用例から文字を類推

読めた文字を含む熟語や用例から、読めない前後の文字を判断

## 4. 文脈から文字を類推

候文の読み方に慣れ、表現の特徴から、読めない文字を判断

# 変体かな

---

現在のひらがなは、一つの音に対して、一つの**字母**（もともになる漢字）が充てられている（**一音一字**）

[例] あ＝安 い＝以 う＝宇 え＝衣 お＝於

現行のひらがなが一音一字となったのは、明治33年（1900）に制定された「小学校令施行規則」による

それ以前のひらがなには、一つの音に対して、多くの字母が存在した

[例] あ＝安・阿・悪・愛 い＝以・伊・意・移 う＝宇・有・雲・憂

現行のひらがなの字母以外の字母を使ったひらがなのことを「**変体かな**」という

# 変体がな一覧表

主要変体がな一覧

	あ段	い段	う段	え段	お段
あ行	ああ何忘 <sup>や</sup> 安安阿悪愛	い以伊 <sup>了</sup> 移 以以伊意移	う宇 <sup>有</sup> 雲 宇宇有雲憂	え江要 <sup>盈</sup> 衣江要盈	お於 <sup>於</sup> 於於於
か行	か可 <sup>可</sup> 賀 <sup>我</sup> 駕 加可可開買我駕	か <sup>我</sup> 幾 <sup>幾</sup> 幾 <sup>文</sup> 起 幾幾幾文起	く久 <sup>具</sup> 九 <sup>求</sup> 久久久具俱九求	け計 <sup>介</sup> 莖 <sup>莖</sup> 莖 <sup>莖</sup> 計計介莖莖莖	こ己 <sup>古</sup> 故 <sup>許</sup> 期 己己古故許期
さ行	さ左 <sup>左</sup> 佐 <sup>佐</sup> 散 <sup>散</sup> 沙 左左佐佐散散沙 斜 <sup>斜</sup> 斜 <sup>斜</sup>	し之 <sup>之</sup> 志 <sup>志</sup> 新 之之志新	す寸 <sup>春</sup> 須 <sup>須</sup> 數 <sup>數</sup> 香 寸寸春須須數香	せ世 <sup>世</sup> 勢 <sup>勢</sup> 世世勢	そ曾 <sup>曾</sup> 所 <sup>所</sup> 楚 <sup>楚</sup> 楚 <sup>楚</sup> そ曾 <sup>曾</sup> 所 <sup>所</sup> 楚 <sup>楚</sup> 楚 <sup>楚</sup>
た行	た太 <sup>多</sup> 堂 <sup>堂</sup> 當 <sup>當</sup> 太多多堂當	ち知 <sup>知</sup> 地 <sup>地</sup> 遲 <sup>遲</sup> 千 知知地遲千	つ門 <sup>門</sup> 門 <sup>門</sup> 徒 <sup>徒</sup> 都 <sup>都</sup> 津 <sup>津</sup> 門門門徒都津	て天 <sup>天</sup> 天 <sup>天</sup> 帝 <sup>帝</sup> 年 <sup>年</sup> 傳 <sup>傳</sup> 轉 <sup>轉</sup> 天天天帝年傳轉	と止 <sup>止</sup> 整 <sup>整</sup> 東 <sup>東</sup> 度 <sup>度</sup> 徒 <sup>徒</sup> 等 <sup>等</sup> 止整整東度徒等
な行	な奈 <sup>奈</sup> 奈 <sup>奈</sup> 哪 <sup>哪</sup> 那 <sup>那</sup> 難 <sup>難</sup> 奈奈奈哪那難	に仁 <sup>仁</sup> 尔 <sup>尔</sup> 尔 <sup>尔</sup> 二 <sup>二</sup> 丹 <sup>丹</sup> 見 <sup>見</sup> 耳 <sup>耳</sup> 仁尔尔二丹見耳	ぬ奴 <sup>奴</sup> 怒 <sup>怒</sup> 努 <sup>努</sup> 奴怒努	ね祢 <sup>祢</sup> 祢 <sup>祢</sup> 年 <sup>年</sup> 念 <sup>念</sup> 熱 <sup>熱</sup> 祢祢年念熱	の乃 <sup>乃</sup> 能 <sup>能</sup> 能 <sup>能</sup> 能 <sup>能</sup> 濃 <sup>濃</sup> 乃乃能能能濃
は行	は波 <sup>波</sup> 破 <sup>破</sup> 葉 <sup>葉</sup> 頗 <sup>頗</sup> 波波者者者盤盤 半八破葉頗	ひ比 <sup>比</sup> 比 <sup>比</sup> 飛 <sup>飛</sup> 非 <sup>非</sup> 悲 <sup>悲</sup> 日 <sup>日</sup> 比比飛非悲日	ふ不 <sup>不</sup> 布 <sup>布</sup> 婦 <sup>婦</sup> 不不布婦	へ戸 <sup>戸</sup> 通 <sup>通</sup> 邊 <sup>邊</sup> 倍 <sup>倍</sup> 弊 <sup>弊</sup> 戸戸通邊倍弊	ほ保 <sup>保</sup> 保 <sup>保</sup> 保 <sup>保</sup> 木 <sup>木</sup> 本 <sup>本</sup> 報 <sup>報</sup> 奉 <sup>奉</sup> 保保保木本報奉 察 <sup>察</sup> 察 <sup>察</sup>
ま行	ま末 <sup>末</sup> 末 <sup>末</sup> 萬 <sup>萬</sup> 真 <sup>真</sup> 滿 <sup>滿</sup> 末末末萬萬真滿	み美 <sup>美</sup> 美 <sup>美</sup> 美 <sup>美</sup> 三 <sup>三</sup> 見 <sup>見</sup> 身 <sup>身</sup> 微 <sup>微</sup> 美美美三見身微	む武 <sup>武</sup> 武 <sup>武</sup> 無 <sup>無</sup> 舞 <sup>舞</sup> 年 <sup>年</sup> 勞 <sup>勞</sup> 天 <sup>天</sup> 武武無舞年勞天	め免 <sup>免</sup> 面 <sup>面</sup> 米 <sup>米</sup> 女免面米	も毛 <sup>毛</sup> 毛 <sup>毛</sup> 毛 <sup>毛</sup> 毛 <sup>毛</sup> 裝 <sup>裝</sup> 母 <sup>母</sup> 茂 <sup>茂</sup> 毛毛毛毛裝母茂
や行	や也 <sup>也</sup> 也 <sup>也</sup> 屋 <sup>屋</sup> 夜 <sup>夜</sup> 耶 <sup>耶</sup> 耶 <sup>耶</sup> 哉 <sup>哉</sup> 也也屋夜耶耶哉		ゆ由 <sup>由</sup> 由 <sup>由</sup> 遊 <sup>遊</sup> 由由由遊		よ与 <sup>与</sup> 与 <sup>与</sup> 与 <sup>与</sup> 餘 <sup>餘</sup> 余 <sup>余</sup> 夜 <sup>夜</sup> 与与与餘余夜
ら行	ら良 <sup>良</sup> 良 <sup>良</sup> 謹 <sup>謹</sup> 良良謹	り利 <sup>利</sup> 利 <sup>利</sup> 梨 <sup>梨</sup> 理 <sup>理</sup> 離 <sup>離</sup> 利利梨梨理離	る留 <sup>留</sup> 留 <sup>留</sup> 流 <sup>流</sup> 流 <sup>流</sup> 累 <sup>累</sup> 類 <sup>類</sup> 留留留流流累類	れ礼 <sup>礼</sup> 礼 <sup>礼</sup> 禮 <sup>禮</sup> 連 <sup>連</sup> 麗 <sup>麗</sup> 礼礼礼連麗	ろ呂 <sup>呂</sup> 呂 <sup>呂</sup> 呂 <sup>呂</sup> 路 <sup>路</sup> 露 <sup>露</sup> 樓 <sup>樓</sup> 婁 <sup>婁</sup> 呂呂呂路露樓婁
わ行	わ和 <sup>和</sup> 和 <sup>和</sup> 王 <sup>王</sup> 王 <sup>王</sup> 倭 <sup>倭</sup> ring 和和和王王倭ring	わ為 <sup>為</sup> 為 <sup>為</sup> 井 <sup>井</sup> 邊 <sup>邊</sup> 為為井邊		ゑ惠 <sup>惠</sup> 惠 <sup>惠</sup> 惠 <sup>惠</sup> 衛 <sup>衛</sup> 惠惠惠衛	を遠 <sup>遠</sup> 遠 <sup>遠</sup> 遠 <sup>遠</sup> 乎 <sup>乎</sup> 越 <sup>越</sup> 遠遠遠乎越

# 助詞として使われる変体がな・漢文助辞の表記

## 助詞として使われる変体がな・漢文助辞の解説文での表記

歴史学では、候文で助詞として使われる変体がなの者(は)・江(え＝へ)・茂(も)、漢文助辞の而(て)・与(と)については、もとの漢字を残して小字で表記するのが一般的

これは、原文が小字で表記される場合が多いことや、活字製版上の都合(?)に由来

カタカナの「二」や漢字の「并(并)」(ならびに)も小字で示すことが多い

※「与」は、変体がなのときは「よ」、漢文助辞としては「と」と読む

与兵衛は江戸え(へ)参り候、  
茂右衛門と安吉も同道に  
て御座候

与兵衛者江戸江参り候、  
茂右衛門与安吉茂同道  
二御座候



# カタカナで書くか ひらがなにするか

---

「二」「三」「八」「之(し)」「世(せ)」の解説文での表記

漢字の「二」「三」「八」「之(し)」「世(せ)」は、ひらがなの字母でもあり、カタカナの字母にもなっている

歴史学の分野では、形を忠実に示す意図(?)から、「ニ」「ミ」「ハ」というように、カタカナ表記にするのが一般的である

「之(し)」「世(せ)」の場合は、それほど厳密ではなく、くずし方の程度によって、ひらがなとカタカナの双方を使い分けている

文学の分野では、変体がなであると解釈して、「に」「み」「は」「し」「せ」と記すことが多い

# 常用漢字と旧字体

## 常用漢字

日本では、公文書や出版物に用いる漢字が定められており、昭和21年(1946)制定の「**当用漢字**」では、不統一だった正字体の一部に代わり、**略字体を正式な字体(新字体)**として採用した。昭和56年(1981)には「**常用漢字**」が定められ、平成22年(2010)の改定で2136字が使われている

## 旧字体

当用漢字の制定によって新字体に変わる前の字体を「**旧字体**」という

[例(旧→新)] 證→証 處→処 醫→医 廣→広 圖→図 臺→台  
彌→弥 寶→宝 鐵→鉄 實→実 濱→浜 龍→竜

古文書の解読文の表記では、常用漢字のあるものは常用漢字に直し、ないものはそのまま記すのが一般的

# 異体字と合字

## 異体字

**正字体** (最も模範的といわれる字体、1716年に清で編まれた『康熙字典』の字体が典型) に対して、これとは異なる字体を**異体字**という

解説文の表記では、異体字は正字(常用漢字など)に直して記すのが一般的

## 合字

2文字以上の文字を合成して1文字にしたもの。かな合字の「**ㇿ**」が特に有名。漢字合字の**𪛗**(久米)・**𪛘**(木工)・**𪛙**(麻呂)などもしばしば使われる

ㇿ より	廂 廟	廡 鹿	刁 寅	𪛗 時	𪛘 相	𪛙 怪	𪛚 囟	𪛛 立	𪛜 乃
𪛝 こと	𪛞 靈	𪛟 夢	𪛠 略	𪛡 柳	𪛢 秋	𪛣 所	𪛤 坐	𪛥 出	𪛦 凡
𪛧 コト	𪛨 質	𪛩 飾	𪛪 宿	𪛫 桑	𪛬 秋	𪛭 松	𪛮 村	𪛯 亦	𪛰 土
𪛱 トキ	𪛲 廩	𪛳 勢	𪛴 善	𪛵 梅	𪛶 美	𪛷 玩	𪛸 杉	𪛹 同	𪛺 互
𪛻 トモ	𪛼 欺	𪛽 愛	𪛾 場	𪛿 婦	𪜀 品	𪜁 承	𪜂 京	𪜃 回	𪜄 弔
𪜅 しめ	𪜆 雖	𪜇 德	𪜈 煮	𪜉 海	𪜊 員	𪜋 炎	𪜌 取	𪜍 多	𪜎 世
𪜏 てい	𪜐 總	𪜑 構	𪜒 等	𪜓 畝	𪜔 峰	𪜕 侯	𪜖 和	𪜗 年	𪜘 冊
	𪜙 叢	𪜚 歌	𪜛 等	𪜜 埒	𪜝 島	𪜞 政	𪜟 姉	𪜠 旨	𪜡 卯
	𪜢 讒	𪜣 違	𪜤 森	𪜥 庵	𪜦 島	𪜧 是	𪜨 定	𪜩 州	𪜪 去
		𪜬 聞	𪜭 無	𪜮 異	𪜯 案	𪜰 珍	𪜱 井	𪜲 事	𪜳 本

---

# 近世文書で使われる「候文」

---

# 近世文書の文体

---

## 口語体と文語体

明治時代の言文一致運動などによって口語体(話し言葉に基づく文体)が文章の主流になるまでは、書き物には文語体(書き言葉用の文体)が使われた

## 候文

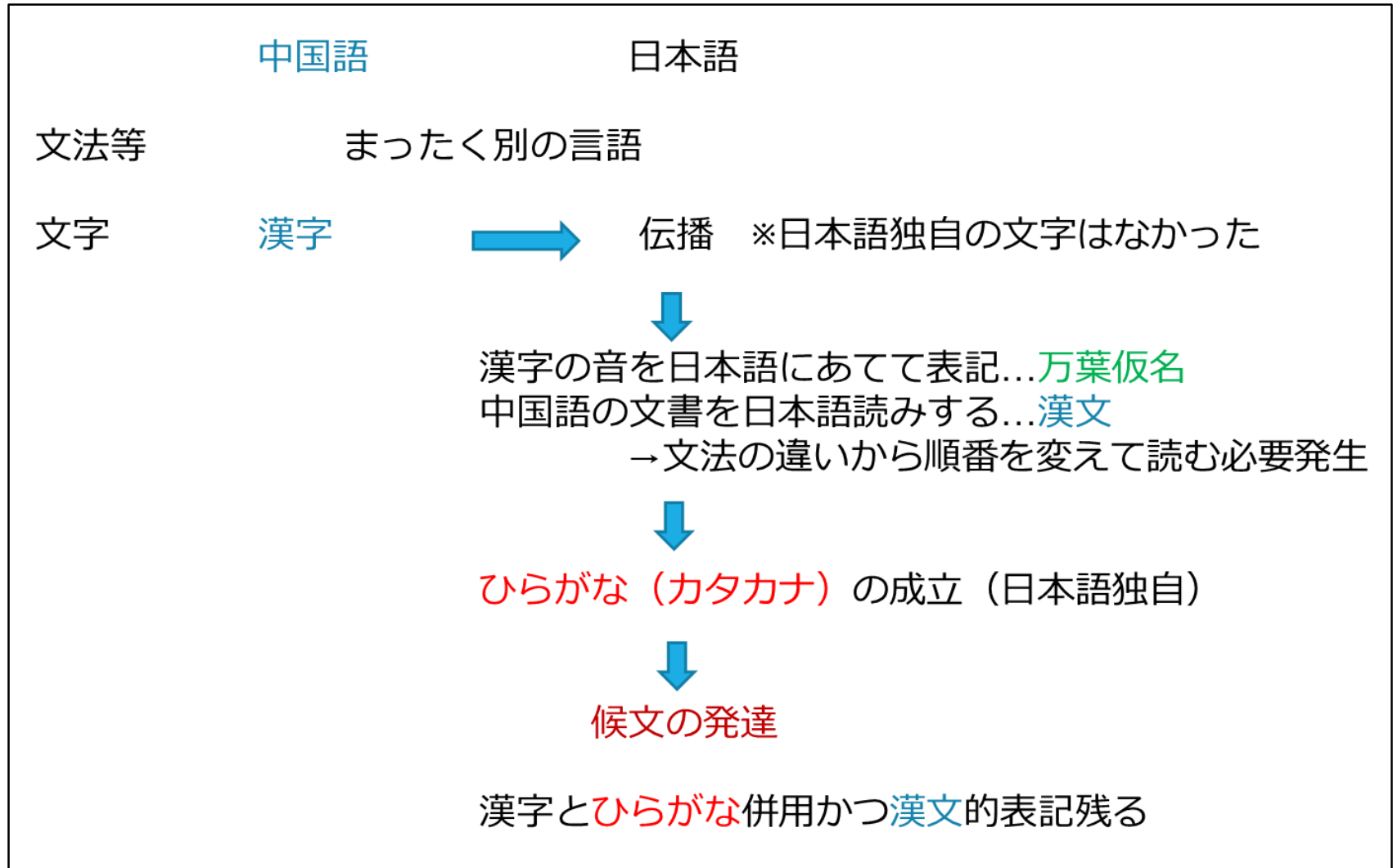
近世の公文書には、丁寧な言い回しを示す動詞「候(そうろう)」を文末に置く「**候文**」と俗称される文語体が使用された

候文は、日本語の語順で並ぶ文章が中心であるが、一部に漢文由来の**定型の返読文字・再読文字**が入る形が一般的である

送りがなや助詞に相当する部分にはひらがな(変体がなを含む)・カタカナ・合字・漢文助辞(而・与など)が使われる

公式文書に近いほど、かなの部分が少なく、漢文調となる傾向が強い

# 和様漢文体(候文)の成り立ち



# 漢文・訓読文・候文

漢文

歲月不待人

訓読文

歲月<sup>レ</sup>不<sup>ズ</sup>待<sup>タ</sup>人<sup>ヲ</sup>

## 訓読文に使われる「返り点」

上中下点	一二三(四)点	レ点	返り点
<p>①「客<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>」 ②「能<sup>ク</sup>」 ③「為<sup>ス</sup>」 ④「狗<sup>ノ</sup>」 ⑤「盗<sup>ム</sup>」 ⑥「者<sup>ノ</sup>」 ⑦「上<sup>」</sup>」</p> <p>↓「客<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>狗<sup>ノ</sup>盗<sup>ム</sup>を為<sup>ス</sup>者<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>」</p>	<p>①「足<sup>ニ</sup>」 ②「以<sup>テ</sup>」 ③「事<sup>ニ</sup>」 ④「父<sup>ノ</sup>」 ⑤「母<sup>ニ</sup>」</p> <p>↓「以<sup>テ</sup>父<sup>ノ</sup>母<sup>ニ</sup>に事<sup>ニ</sup>ふるに足<sup>ル</sup>」</p>	<p>①「獸<sup>ノ</sup>」 ②「見<sup>レ</sup>」 ③「之<sup>ヲ</sup>」 ④「皆<sup>シ</sup>」 ⑤「走<sup>ル</sup>」</p> <p>↓「獸<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>を見<sup>レ</sup>て皆<sup>シ</sup>走<sup>ル</sup>」</p>	<p>読み方・例文</p> <p>レ点の下の一字を先に読んでから、上の字に一字返って読む。</p>

候文

歲月人を不待

基本的には読み下すが、返読文字「不」は残る

# 返読文字

文言	読み	使用例
<p>雖 得 乍 難 尔 被 被 不 不 不 不 奉 無 令 為</p> <p>以 依 於 可 可 可 可 期 如</p>	<p>い え ど も を え な が ら が た し に ら れ せ ら れ ず を え ず に お よ ば ず た て ま つ る な し せ し む せ せ の た め と し て と な し を も つ て に よ り に お い て べ し た る べ し ら る べ し せ し む べ し を き す の ご と し</p>	<p>雖然（しかるといえども） 得其意（そのいをえ） 乍恐（おそれながら） 難成（なりがたし） 尔今（いまに） 被仰付（おおせつけられ） 被為有（あらせられ） 不残（のこらず） 不得止（やむをえず） 不及申（もうすにおよばず） 奉存（ぞんじたてまつる） 無抛（よんどころなし） 令裏嘗（うらがきせしむ） 為致（いたさせ） 為後日（ごじつのため） 為惣代（そうだいとして） 為悦（よろこびとなす） 以書付（かきつけをもって） 依之（これにより） 於有之（これあるにおいて） 可申上（もうしあぐべし） 可為曲事（くせごとたるべし） 可為成（ならるべし） 可令皆済（かいさいせしむべし） 期後説（こうせつをきす） 如斯（かくのごとし）</p>



# 助動詞は返読文字になりやすい

種類	語	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
受身	被 (らる)	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ
推量	可 (べし)	(べく)	べく	べし	べき	べけれ	—
打消	不 (ず)	(ず) ざら	ず ざり	ず	ぬ ざる	ね ざれ	ざれ
打消推量	間敷 (まじ)	(まじく) まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	—
伝聞・推定	也 (なり)	—	なり	なり	なる	なれ	—
断定	也 (なり)	なら	なり に	なり	なる	なれ	なれ
使役	為 (さす)	せ	せ	す	する	すれ	せよ
使役	令 (しむ)	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ
希望	度 (たし)	(たく) たから	たく たかり	たし	たき たかる	たけれ	—
比況	如 (ごとし)	(ごとく)	ごとく	ごとし	ごとき	—	—

ピンク色の語は、候文において返読文字として現れることが多い。

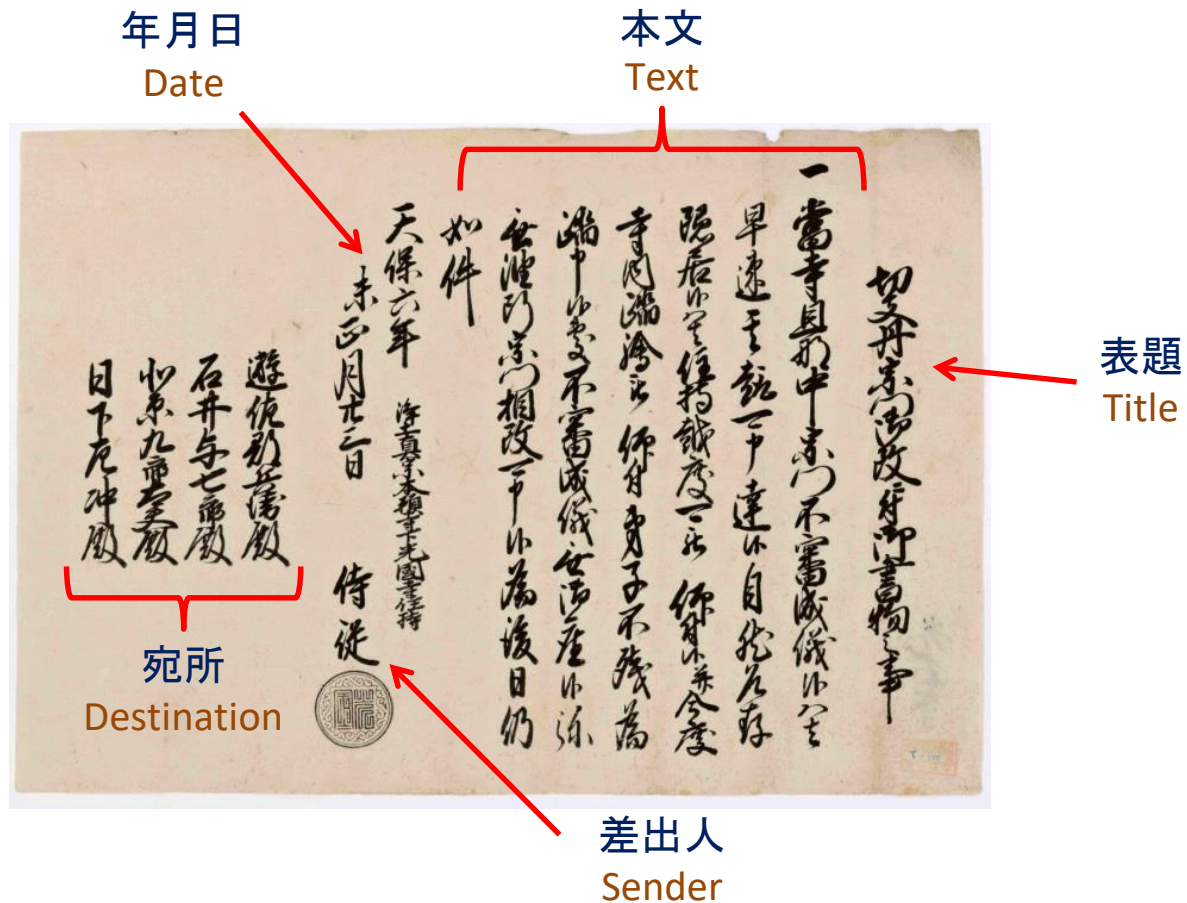
---

# 近世文書の様式に現れる身分・格式

---

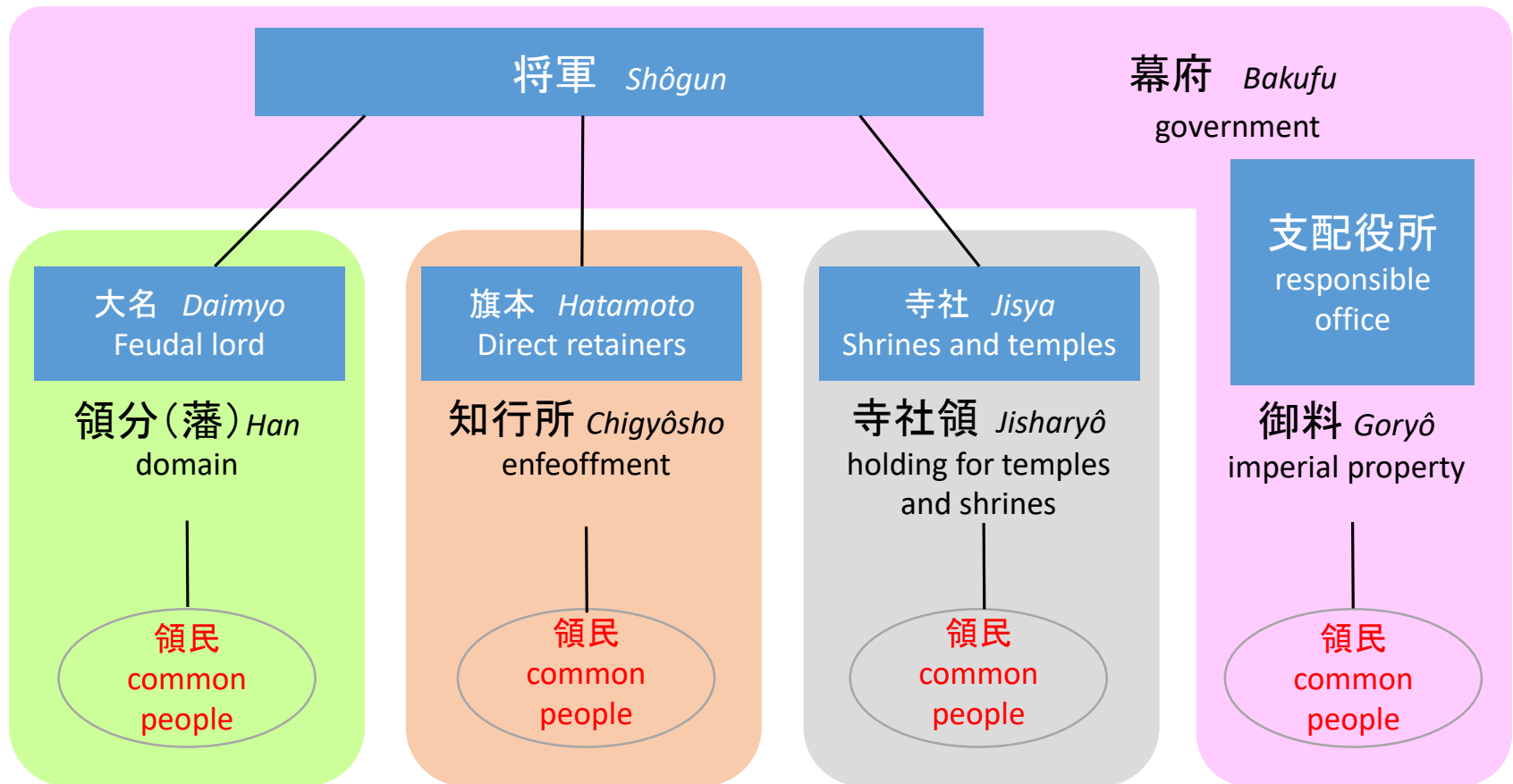
# 古文書の記載要素

古文書の記載要素には、表題・本文・年月日・差出人・宛所などがある。このほかに奥書・裏書・端裏書などが加わる場合もある

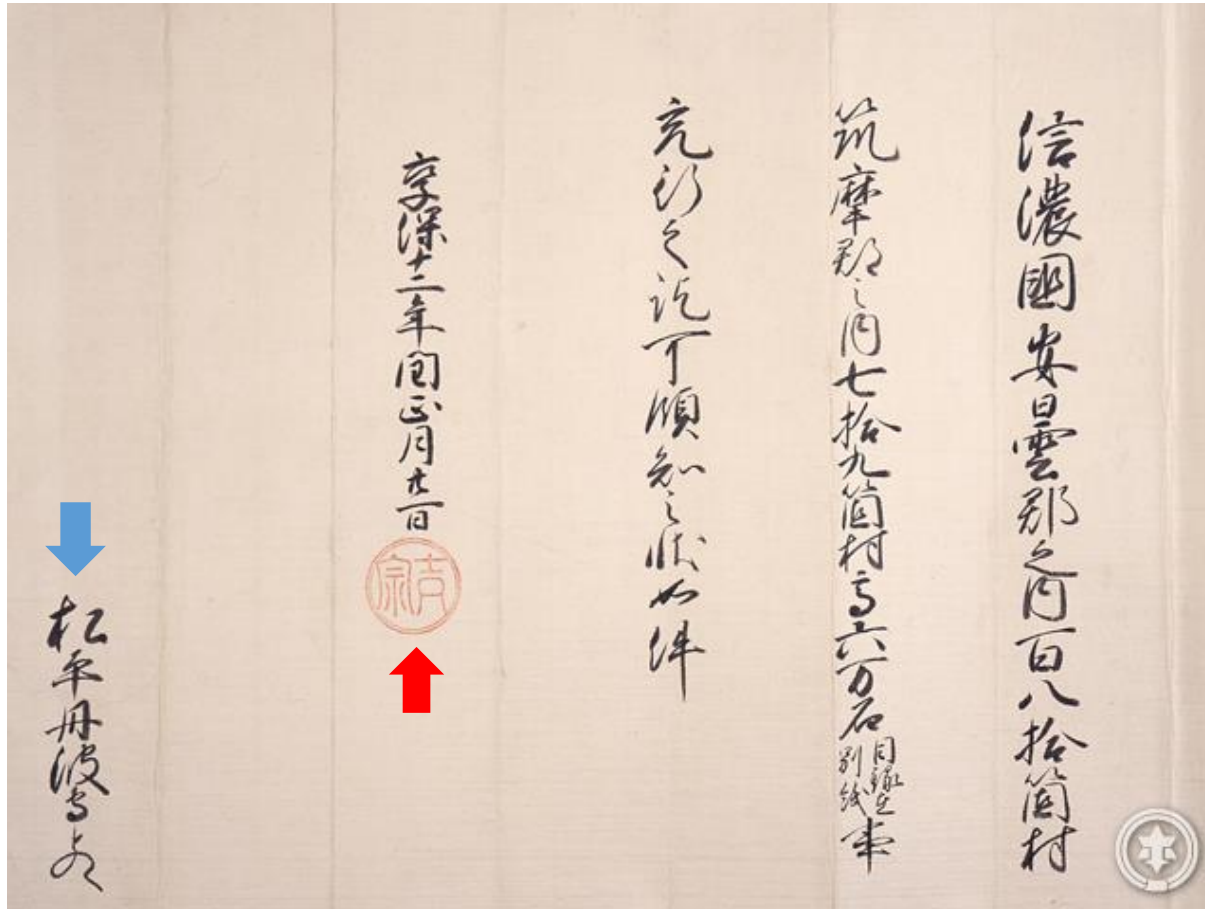


# 江戸時代の幕藩制支配システム

将軍を頂点とする幕府と直轄領、大名領(幕末期に276藩、改易や新規取立で変動があった)・旗本領・寺社領などからなる

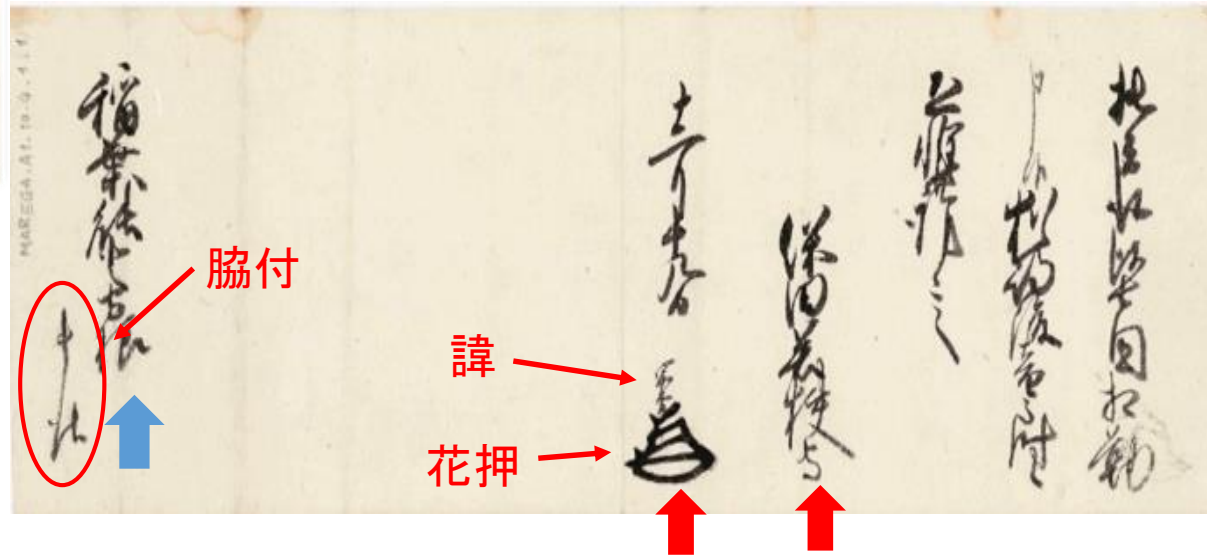


# 文書様式にあらわれる身分・格式



將軍(徳川吉宗)が大名(松平丹波守光慈)にあてた領知朱印状  
將軍の朱印が年月日の直下に置かれ、宛先の大名の名前が左下隅に書かれる

# 文書様式にあらわれる身分・格式



幕府の宗門改役(保田若狭守宗雪)が大名(稲葉能登守信通)へあてた書状折紙様式で差出人の諱・花押(書判)を添えて敬意を示す。宛先の大名は左上隅に記され、「貴報」という脇付が添えられている

陸奥國津佐郡心方子石  
 上野國碓氷郡心方子石  
 心方七子石  
圓録在別紙  
 津佐左京子石津佐一學子丁  
 心方子石  
 全丁願知者也 仍如件

(朱印)

寛文四年心方石



津佐越中守

## ①の基本データ

記述項目	記載事項
資料群名	陸奥国弘前津軽家文書
番号	22B/683
表題	(陸奥国津軽郡・上野国勢多郡のうち4万7000石知行につき朱印状)
年月日	寛文4年(1664)4月5日
差出人	(徳川家綱)
宛所	津軽越中守とのへ
形態	状(縦紙)
数量	1通(包紙とも)
ノート	<p>原文書は国文学研究資料館所蔵。国文研での表題は「厳有院様(家綱)御朱印状 写共」。</p> <p>津軽越中守は弘前藩4代当主の津軽信政のこと。津軽左京は信政の従兄弟の津軽信敏(黒石領主)、津軽一学は信敏の弟の津軽信純。</p>



# 〈補足〉江戸時代の人名

いなば	のとのかみ	たちばなの	のぶみち
稲葉	能登守	(橘)	信通
苗字	通称(仮名)	氏(本姓)	諱

- **苗字** 家の名前。中国から日本に入ってきた「名字(なあざな)」が起源。江戸時代には「苗字」と書かれたが、明治以降は「名字」と書くのが一般的。地名・地形・方位・職業などからとったものが多い。
- **通称(仮名:けみょう)** 諱を使うことを避けるため、便宜的に用いられた名称。よく使われる「～左衛門」「～右衛門」「～兵衛」「～助」「～之丞」「～之進」などは、古代の官職にちなんで鎌倉時代以降に普及した。従五位下(諸大夫)以上に与えられる官途名や、文人などが付ける雅号も通称の一種と分類される。
- **氏(本姓)** 家系をあらわす名称で、古代以来の氏族名を用いるのが通例。苗字との違いは、氏が朝廷から下賜されたものであるのに対し、苗字は自分で名乗ったものという点である。江戸時代の武家の出自は、地方の土豪など身分の低い者であったため、江戸初期に家系の貴種性を主張するため、氏(本姓)を作り出したものが多い。
- **諱** 本名のこと。古代には、貴人や死者を本名で呼ぶことは避ける(忌む)習慣があったため、そこから転じて「本当の名前」を指すようになった。